

彦根市埋蔵文化財調査報告 第15集

# 馬 場 遺 跡

— 彦根市日夏町字上大形所在 —

昭和63年3月

彦根市教育委員会

## 序

彦根市は、市制施行以来、半世紀の年輪が刻みこまれた記念すべき年を契機として、新たな半世紀に向っての第1歩を踏み出しました。21世紀の新しい時代に向い、社会的変化はますます加速度が加わるものと予想されます。こうした中で当市教育委員会は、「人づくり」を最大の課題として、時代をリードし、なおかつ大地にしっかりと根を下ろした人間を形成するため、生涯教育についての方向性を大きく打ち出していかなければならぬものと考えております。この様な意味で過去の人々の英知をいかに引き継いで行くのかは、今後ますます重要な課題であると言えましょう。

今回発掘調査を実施しました馬場遺跡は、弥生時代中期の資料を純粹な形で私達の眼前に見せてくれました。今後この地域の歴史を考える上で貴重な資料になるものと考えられます。彦根市における考古学的資料はまだまだ少なく、今後も調査を進めて行く所存でありますので一層のご支援をお願いいたします。

最後になりましたが、この調査にご理解をいただき多大なご協力をいただきました田中商事株式会社に対しましては厚くお礼をのべるとともに、ご協力をいただきました関係の皆様方にも深く謝意を表するしだいであります。

昭和63年3月

彦根市教育委員会

教育長 河原保男

## 例　　言

1. 本書は、彦根市日夏町字上大形 3729 他に所在する馬場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、宅地造成工事に先立ち、(株)田中商事の委託を受けて彦根市教育委員会が実施したものである。
3. 本調査の事務局は次のとおりである。

彦根市教育委員会社会教育課

課長 安沢 進

課長補佐兼庶務係長 尾本 吉史

文化財係長 国定信夫

4. 現地調査および整理・報告は社会教育課技師本田修平が担当した。
5. 現地調査および整理・報告等の作業は次の構成で実施した。

調査作業員 出口加寿夫・西村 昭三・辻 勘次・出口美代子・疋田千鶴子  
若林みづ子・森 ひさ子・西村 梅野・田中 敏江・高仁寿美子  
寺村きみ子・寺村さた子・寺村 まつ・古川 久・出口 房江  
竹中 美代

整理作業員 大西 裕子・小堀真由美・伏木 和子

以上敬称略
6. 本調査で出土した遺物および資料は当教育委員会が保管している。

## \* 目　　次 \*

1. はじめに	3
2. 位置と環境	3
3. 調査の結果	5
4. まとめ	9
5. 出土遺物観察表	11
図版1 調査地点と周辺の遺跡	17
図版2 トレンチ配置図	18
図版3~7 遺構図	19
図版8~13 出土遺物実測図	24
図版14~19 出土遺物写真	30
図版20~24 遺構写真	36

## 1. はじめに

馬場遺跡は、県立河瀬高等学校新設に伴ない昭和57年度に県教育委員会文化財保護課の指導で（財）滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施している遺跡である。その後市内遺跡分布調査で遺跡の範囲が日夏町まで広がっている事が確認されていたものである。当遺跡周辺は数回の試掘調査を実施したが、疊層・スクモ層を確認したのみにとどまっていた。

昭和62年10月に、（株）田中商事の宅地開発計画に基づく事前審査が提出された。当市教育委員会では該当地が馬場遺跡の範囲内である事が予想されたため、この段階で周知の遺跡の範囲であり予定通り開発を実施する場合は文化財保護法に基づく手続きが必要であるとともに事前の調査が必要である旨回答した。その後、昭和62年10月15日付けで文化財保護法第57条に基づく埋蔵文化財発掘届及び発掘調査依頼が当教育委員会に（株）田中商事から提出され、協議に入った。この結果、開発予定地約25,000m<sup>2</sup>あり、遺物の散布状況より全面に遺跡が広がっているとは考えにくいため、先ず試掘調査を実施し、遺跡の範囲を把握して調査計画を立てる事とした。当市教育委員会では協議結果に基づき、同年10月20日付け彦教委社第1068号で発掘届の進達および発掘調査通知を県教育委員会に提出した。

試掘調査は、同年11月7日に（株）田中商事代表取締役田中一郎氏立会のもとに実施した。試掘トレチは、ほぼ2×2mのものを重複にて計20ヶ所設定して、遺構および包含層の有無等遺跡の広がりを見たわけであるが、開発予定地の東の市道側約 $\frac{1}{4}$ が遺跡の範囲である事が確認できた。この調査結果に基づき、発掘調査計画を立て、（株）田中商事と再度協議し、昭和62年11月24日付で馬場遺跡発掘調査に係る委託契約を結ぶに至った。

彦根市教育委員会では、この委託契約に基づき昭和62年12月1日より現地の発掘調査を実施した。

## 2. 位置と環境

馬場遺跡の今回の調査地点は、日夏町・清崎町・川瀬馬場町の境に位置している。日夏町は、旧朝鮮人街道に沿って広がっており、宇曾川と犬上川の沖積地に立地しており、西側には琵琶湖岸の独立丘陵である荒神山が宇曾川をいだく様に存在している。中世の日夏は、荒神山東側の山裾から宇曾川に沿って集落が広がっていた事が近年の古屋敷遺跡や字

曾川改修工事に伴なう妙楽寺遺跡の発掘調査で明らかになりつつある。荒神山東方の尾根に日夏城があったと言われることや、琵琶湖から宇曾川に至る水運の利用等がその立地の有力な要因であったと考えられる。彦根市史の日夏古屋敷絵図は集落中央を宇曾川が流れている様子が描かれているのはこの様な事情を物語っていると思われる。戦国時代末には日夏城が落城したと伝えられるとともに、江戸時代における朝鮮人街道の整備が現在地における日夏の形成契機になったと思われる。日夏町周辺は湖岸に近い沖積地であるため地下水位が現在でも高いが、古代から低湿地の発達した地形であったらしく、各所に湿田があったとともに湧水が多い。この様な地形は弥生時代における初期農耕の水田開発においては非常に有利な条件であった。ほ場整備および宇曾川改修に伴なって発掘調査された妙楽寺遺跡は確実に弥生時代中期まで遡れる資料が出土しており、この時代以降平安時代に至る複合遺跡であるとともに、一部は前述した様に戦国時代末期まで続く集落跡であった。また、馬場遺跡は、その大部分が川瀬馬場町に所在し、県立河瀬高等学校用地がその中心になると考えられ、河瀬高等学校新設に伴ない県教育委員会の指導のもとに（財）滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施し、弥生時代中期後半のピットを中心とする掘立柱建物跡を多数検出し、集落跡である事が明らかになった遺跡である。現在、荒神山の東側を屈曲して流れる宇曾川は、地図で見るとデルタの発達が見られないであるが、荒神山と湖岸の間には曾根沼・野田沼の内湖があり、この内湖をかいして琵琶湖とながっていたと考えられる。この内湖周辺に弥生時代前期の遺跡が存在しても不思議ではなく、一つの可能性として考える必要がある様に思われる。

湖岸の独立丘陵たる荒神山には、古墳時代の後期群集墳が現在確認できているもので25基築かれているが、現在でも多くの社寺をその山域の中にもっており、そこには聖域としての歴史をかいま見る事ができよう。古代末における東大寺莊園霸流庄もこの荒神山をシンボルとする地域で展開された歴史のひとこまである。

中世においては、近江の国は佐々木氏が守護職として権勢をふるうわけであるが、中世後半のこの地は江南の六角氏と江北の京極氏の政争の場として戦乱がくり返えされた。日夏氏は江南六角氏につかえる土豪として荒神山東側の尾根に城館をかまえていた事は前記したとおりである。

この地域は、荒神山を地域的なシンボルとしていたと考えられ、宇曾川を主要な河川とし、江戸時代に朝鮮人街道として整備された巡礼街道が湖岸付近の主要街道であり、この水陸の交通路を中心に歴史を形成してきたといえる。

県立河瀬高等学校建設に伴なって実施された馬場遺跡の発掘調査結果を1984年3月滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会発行の『馬場遺跡発掘調査報告書』からまと

めれば、以下の通りになる。遺構は、掘立柱建物14棟におよぶがその大部分のものは1間×1間・1間×2間もしくは2間×2間のもので10m<sup>2</sup>前後の面積のもので、総数は14棟検出されている。この中の一部のピットには柱根が残っているものがあった。この他の遺構としては土塙が20ヶ所検出されているが、その性格は不明である。また、溝および河川も確認されている。この様に、馬場遺跡は掘立柱建物跡を中心とする弥生時代中期後半の遺跡で、竪穴住居跡を含まない掘立柱建物群の集落としてあまり例のない資料であり、弥生時代の集落を考える上で非常に貴重な資料である。

### 3. 調査の結果

馬場遺跡は、試掘調査の結果その範囲がほぼ5000m<sup>2</sup>以内である事が確認できたため、この地域を調査範囲として、中央部に現況の田と並行して伸びるトレンチを「キ」字状に設定して確実な遺跡の範囲を確認する事を第一の目標とした。これは、この遺跡が沖積地の舌状の微高地に立地していると考えられたためで、試掘調査でも遺跡が確認できなかった所は、南および西側が砂礫層およびシルト層の沖積作用の結果形成された地形を示し、北側はスクモ層で低湿地であった事が考えられたためである。この「キ」の字状に設定したトレンチで遺構が検出できた場合はトレンチを増設して遺跡の性格を把握する事として調査を計画した。この結果、トレンチは計9ヶ所になった。

基本的な土層は、耕作土が40cm前後あり、第2層の床土は灰褐色粘質土層で10~20cmあり、第3層は褐色砂礫土から褐灰色粘質土層になり遺構面になる。ただし、一部は、植物遺体混りの黒褐色粘土層になり、この部分は低湿地であったと考えられ無遺構であった。

以下、各遺構について述べてみたい。

#### 〔掘立柱建物跡〕

各トレンチで検出できたピットは径10cmのものから径1m近い土壠と区別のつけにくいものまで多数検出しておらず、深さも平均で10cm前後であり浅いものは5cmのものまである。このため、不整形な形で建物跡とした場合、收拾がつかなくなるおそれがあるため、柱間がほぼ等距離（桁行の柱間と梁行の柱間は異なる場合が多い）をなし、かつ桁行と梁行の軸線が直交する事を原則とした。ただしピットが検出できなかった所やトレンチの外側に伸びる可能性が考えられる所もあり、一応の複元案としておきたい。

#### S B - 1

1 トレンチ南端で検出したもので、桁行 2 間・梁行 2 間のもので、柱穴は直径 30cm 前後のものであり、柱間は桁間 2 m で梁間 1.4 m であり、床面積は 15.2m<sup>2</sup> である。主軸は N - 53° - E を計る。

#### S B - 2

S B - 1 と重複するもので、桁行 1 間・梁行 2 間と考えられるもので、柱穴は直径 30cm 前後のものであり、床面積は 9.68m<sup>2</sup> である。主軸は N - 41° - W を計るが、梁行はまだ伸びる可能性がある。

#### S B - 3

S B - 1・2 と重複するもので、桁行 1 間・梁間 2 間と考えられるもので、柱穴は 30cm 前後の直径をもつものであり、柱間は桁間 2.4 m で梁間 1.3 m であり、床面積は 6.24 m<sup>2</sup> である。主軸は N - 28° - W を計るが、梁行はまだ伸びる可能性がある。

#### S B - 4

S B - 1 の約 1 m 北側で検出したもので、桁行 1 間・梁行 2 間のもので、柱穴は直径 30 cm 以下のものであり、柱間は桁間 2.6 m で梁間 1.4 m であり、床面積は 7.28m<sup>2</sup> である。主軸は N - 67° - W を計る。

#### S B - 5

S B - 4 の北側 0.5 m の所で検出したもので、桁行 1 間・梁行 1 間のもので、柱穴は直径 30 cm 以下のものであり、柱間は桁間 2.6 m で梁間 1.4 m であるが、S B - 4 と同規模のものと考えられ、1 間 × 2 間のものと考えられる。主軸は N - 51° - W を計る。

#### S B - 6

2 トレンチ東側で検出したもので、現状では 1 間 × 2 間のものであるがトレンチ外に伸び桁行 2 間・梁行 2 間と考えられ、柱穴は 30cm 前後の直径をもち、柱間は桁間 1.5 m で梁間は 2 m のものである。主軸は N - 66° - E を計る。

#### S B - 7

S B - 6 と重複するもので、現状では 1 間 × 1 間であるが、トレンチ外に伸び桁行 1 間

・梁行2間の建物と考えられ、柱穴は直径30cm前後のものであり、柱間は桁間2.2mで梁間1.7mである。主軸はN-45°-Eである。

#### S B - 8

S B - 7の西側1.5mの所で検出したもので、現状で2間×1間であるが、この建物もトレンチ外に伸び桁行2間・梁行2間と考えられ、柱穴は30cm前後で、柱間は桁間1.1mで梁間1.5mである。主軸はN-19°-Eである。

#### S B - 9

S B - 8の西側2mの所で検出したもので、桁行2間・梁行2間で、柱穴は30cm以下のもので、柱間は1.5mのものである。ただし、この建物もトレンチの外に伸びる可能性があるが現状で9m<sup>2</sup>で、主軸はN-48°-Eである。

#### S B - 10

S B - 9とかさなるもので、現状で1間×2間であるがトレンチ外に伸びると考えられ桁行2間・梁行2間の建物であろう。柱穴は40cm以下で、柱間は1.4mである。主軸はN-54°-Eである。

#### S B - 11

S B - 10西側に隣接するもので、現状では1間×2間であるがトレンチ外に伸び桁行2間・梁行2間のものであろう。柱穴は30cm前後のもので、柱間は桁間1mで梁間1.7mのものである。主軸はN-60°-Eである。

#### S B - 12

S B - 11西側に接して検出したもので、現状で1間×3間のもので、柱穴は30cm前後で、柱間は1mであるが、トレンチ外に伸びる。主軸はN-23°-Eである。

#### S B - 13

3トレンチで検出できたもので、桁行1間で梁行2間のもので、柱穴は最大50cmの直径をもち、柱間は桁間2m・梁間1.5m、床面積は6m<sup>2</sup>である。主軸はN-20°-Eである。

#### S B - 14

4 トレンチ南端で検出できたもので、桁行 1 間・梁行 2 間のもので、柱穴は 50cm 前後のもので、柱間は桁間 2 m で梁間 1.3 m あり、床面積は 5.2 m<sup>2</sup> である。主軸は N - 42° - E であった。

#### S B - 15

S B - 14 の北側 3 m の所にあり、桁行 1 間で梁行 2 間のもので、柱穴は 50cm 以下であり、柱間は桁間 2.4 m で梁間 1.5 m あり、床面積は 7.2 m<sup>2</sup> を計る。主軸は N - 61° - W である。

#### S B - 16

S B - 15 の北側に隣接して検出したもので、桁行 2 間で梁行 2 間、柱穴は最大 50cm あり、柱間は桁間 1.4 m で梁間 1.6 m あり、床面積は 11.76 m<sup>2</sup> を計る。主軸は N - 69° - E である。

#### S B - 17

5 トレンチ南端で検出したもので、現状で 1 間 × 2 間であるがトレンチ外に伸びて桁行 2 間で梁行 2 間と考えられ、柱穴は 50cm 前後で、柱間は 桁間 1.3 m で梁間 2 m である。主軸は N - 43° - W である。

#### S B - 18

S B - 17 の北側 2 m の所にあり、桁行 1 間で梁行 2 間あり、柱穴は 30cm 前後で、柱間は 桁間 1.8 m で梁間 1.4 m で、床面積は 5.24 m<sup>2</sup> を計る。主軸は N - 28° - E である。

#### S B - 19

5 トレンチ北端で検出したもので現状で 1 間 × 1 間であるがトレンチ外に伸びて桁行 1 間で梁行 2 間と考えられ、柱穴は 30cm 前後あり、柱間は 桁間 1.4 m で梁間 1 m である。主軸は、N - 40° - E である。

#### S B - 20

6 トレンチ南端で確認したもので、桁行 1 間で梁行 2 間であり、柱穴は 40cm 以下であり、柱間は 桁間 2.3 m で梁間 1.5 m あり、床面積は 6.9 m<sup>2</sup> を計る。主軸は N - 40° - E である。

## S B - 21

S B-20 と重なるもので、桁行 2 間で梁間 2 間であり、柱穴は最大 60cm で、柱間は桁間 2.3m で梁間 2.6m あり、床面積は 23.92m<sup>2</sup> を計る。主軸は N - 52° - W である。

### 〔土塙〕

土塙は各トレンチで 1m 前後の円形のもの、長径 1.5m 前後の楕円形のもの、また方形のもの等検出されているが、深さ 10~20cm と浅く、井戸や土塙墓等は考えにくいものであり、その性格は不明である。また、深い地形のくぼみに包含層の土が溜ったものもあると考えられる。

2T 東端部では、現状で直径 7m ほどの SX-1 を検出した。この SX-1 は深さ 40cm あり、東側には甌が多量に破棄されていたが、中の土は植物遺体の混った黒灰色砂質土であり、集落内に残された湿地状の落ち込みであると考えられる。

### 〔溝〕

溝は、遺跡の西端で SD-3・SD-4・SD-5 の 3 本が検出されている。この 3 本の溝は交わり結果的に 1 本になるもので、2 段の段掘りがなされており人工の溝と考えられる。この溝の中からは、鍬・弓・高坏等の木製品や獸骨等が出土している。

## 4. ま と め

以上の様に、今回の馬場遺跡の発掘調査では掘立柱建物跡 21 株・土塙・溝等を検出したが、この調査結果から考えられる遺跡の性格を考えてみたい。

馬場遺跡は、沖積地の低湿地に囲まれた極低い微高地に立地するもので、今回の調査地北側の中央部で無構造のスクモ混りの黒褐色粘土層が検出されており、集落内にも低湿地が広がっていたことが想像される。また、溝の掘り込み中には湧水に悩まされた事等から地下水位も高かったものと考えられ、これらの水を抜くために溝が掘られていたものと考えられる。ピットが掘られている地山は遺跡中央部は黄褐色粘質土であったが、周辺部に行くと砂質土から礫混り土に変わり、地下水位が高かった事とあいまって良好な生活環境とは言いがたい。このため、竪穴式住居では湿気が強く、立地的にむいていなかったと考えられ、この事から平地式または高床式の住居を基本的な形態としていたと考えられる。

出土遺物は、石斧・砥石の石製品、鍬・弓・高坏等の木製品、土器が主である。土器は

県教育委員会が県立河瀬高等学校建設時に実施した発掘調査の結果と同様第Ⅲ・Ⅳ様式の中期後半だけのものであったが、建物の重複から遺構的には3時期あったと考えられる。この集落は、この時期だけであり以降には続かなかったのであり、極限られた時期だけで廃絶してしまったのも前記した地形的な条件と密接な関係があるものと考えられる。

弥生時代中期における掘立柱建物だけの集落跡の資料はまだ少なく、今後この様な地形的条件の所の調査が進むと資料が増加するものと考えられるが、イメージとしては南方の水上住居的なものが考えられるのではないだろうか。弥生時代においてもこの様な住居様式を考慮しておく必要があるだろう。

## 5. 馬場遺跡出土遺物観察表

番号	種類	形	量	性	調	査	土・色調・焼成	備考
1	弦生式土器 壺	口径9.7cm 高20cm	○口縁部は、しまった腹部より一外唇して開き、すぐ内唇して立ち上がり、端部を面取りしておさめる。 ○体部は、しまった腹部より肩はあまり張らず中位部にある最大腹径部に至り、やや小さな底部まで上下にはぼ効果が作られる。 ○底部は平底である。	○口縁部は、内外面ともに焼ナデ調整。 ○腹部外面は密なへラ磨き調整で、内面はしばり痕を残して調整。 ○体部外面は密なへラ磨き調整で、内面はへラ削り調整。			胎土：良好 色調：灰黄色 焼成：やや軟	5T SX-5-1 出土
2	弦生式土器 壺	口径12cm	同上		○口縁部は、内外面ともに焼ナデ調整。 ○腹部外面は粗いハケ調整で、内面は機方向の粗いハケ調整。 ○体部外面は粗いハケ調整であるが、内面は器表剥離脱のため不明。		胎土：良好 色調：淡灰褐色 焼成：やや軟	2T 2X-2-1 出土
3	弦生式土器 壺	口径9.7cm		○口縁部は腹部より外唇して開き上半部を上方に折り曲げ、端部を丸くおさめた口縁帯を作り、外面に弱い凹線を入れる。 ○肩部はあまり張らない。	○頭部から口縁部は焼ナデ調整。 ○腹部外面はハケ調整であるが、内面は器表剥離のため不明。		胎土：良好 色調：明赤褐色 焼成：やや硬	2T SD-2-3 出土
4	弦生式土器 壺	口径22cm		○口縁部は、しまった腹部から外唇して開き、上半部を上方に折り返し端部を面取りしておさめる。	○口縁部は、内外面ともに焼ナデ調整。 ○腹部外面はへラ磨き調整で、内面は器表剥離のため不明。		胎土：良好 色調：暗赤褐色 焼成：やや軟	2T SX-2-1 出土
5	弦生式土器 壺	口径22.9cm		○口縁部は、しまった腹部より外唇して開き上半部を上方に折り返し端部を面取りしておさめ、外面に凹線を2条入れその間に放状文を入れる。 ○頭部外面に列点文を入れた凸唇をほどこす。 ○肩部はやや張っている。	○口縁部は内外面ともに焼ナデ調整。 ○頭部外面は粗いハケ調整で、内面は機方向の粗いハケ調整。 ○頭部は、外面粗いハケ調整で内面は器表剥離のため不明。		胎土：良好 色調：暗赤褐色 焼成：やや軟	9T SD-9-5 出土
6	弦生式土器 壺			○口縁部は外唇して開き、上面に2条の列点文を入れる。 ○頭部はしまっていない。	○口縁部は焼ナデ調整。 ○頭部は外面粗いハケ調整で、内面は機方向の粗いハケ調整。		胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：硬	8T SD-8-3 出土

番号	種類	器法量	形態	測量	土・色調・焼成	備考
			○体部は最大直径が中位部にあり上下対称のものと思われ、上部に外点文を3ヶ所ほどし、その間に並行状線と斜格子文を入れる。	○体部は内外面ともに低いハケ調整。		
7	茶生式土器 甌	口径22.6cm	○口縁部は上方に折り曲げ、3ヶ所の山型口縁を作り、端部外面と折り曲げ部外面に溝みを入れ、口縁部外面にはヘラ状の工具による割突文を入れる。 ○体部は、あまり張らない肩部より腹部に至り、最大直径は中位部と思われる。	○口縁部外面は低いハケ調整で、内面は前方の低いハケ調整であり、端部はナデ調整。 ○体部外面は低いハケ調整で、内面はナデ上部調整と思われる。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：硬 2T SX-2-1 出土	
8	茶生式土器 甌	口径23.0cm	○口縁部は上方に折り曲げて外画下方をやや垂下さげにし、口縁部を作り、4ヶ所の山型口縁と口縁部下面には割みを入れる。 ○体部は、あまり張らない肩部より腹部に至り、最大直径は中位部と思われる。	○口縁部外面は絞方向の低いハケ調整で、内面は絞方向の低いハケ調整であり、端部はナデ調整。 ○体部外面は低いハケ調整であるが、肩部に絞方向のハケ調整を入れ、内面はナデ上げ調整と思われる。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：硬 2T SX-2-1 出土	
9	茶生式土器 甌	口径22.2cm	○口縁部は、あまりしまらない頸部より外側して伸び上部を強く折り曲げる。 ○体部は、あまり張らない肩部より腹部に至り、最大直径は中位部と思われる。	○口縁部外面は絞方向の低いハケ調整であり、端部は模方向の低いハケ調整であり、端部はナデ調整。 ○体部外面は低いハケ調整であるが、肩部には絞方向のハケ調整を入れ、内面はナデ上げ調整と思われる。	胎土：良好 色調：褐色 焼成：やや硬 7T P-7-1 出土	
10	茶生式土器 甌	口径21.6cm	○口縁部は、ややしまった頸部から外側して開き上部を折り曲げ、端部を強く面取りしておさめる。 ○体部は、あまり張らない肩部より腹部に至り、最大直径は中位部と思われる。	○口縁部外面は絞方向の低いハケ調整で、内面は模方向の低いハケ調整であり、端部はナデ調整。 ○体部外面は、絞方向の低いハケ調整をほどこし、その後頸部から肩部にかけて模方向のハケ調整を入れる。 ○体部内面はナデ上げ調整と思われる。	胎土：良好 色調：褐色 焼成：硬 2T SX-2-1 出土	

番号	種類	法 量	形 態	調 査	土・色調・焼成 備考	
11	弥生式土器 壺	口径38.8cm 高さ23.6cm	○口縁部は、ややしまった要部より外側で開き上部を折り返し端部を開く面取りしておさる。 ○体部は、あまり盛らない要部より中位にあり、体部は、斜方向の最大膨脹部になり、そのままやや小さい平底の底部に至る。	○口縁部は、外斜方向の組いいハケ調整で、内面は横方向の組いいハケ調整。 ○要部は外斜方向の組いいハケ調整で、内面横方向の組いいハケ調整。 ○体部は、斜方向の組いいハケ調整後上半部に横方向のハケ調整を入れ、内面はナデ上げ調整と思われる。	胎土：良好 色調：灰黄色 焼成：硬 出土 2 T SX-2-1	
12	弥生式土器 壺	口径36.8cm 高さ23.6cm	○小さな平底の底部より体部は外傾して開く。	○外面は折なハケ調整で、内面はハケ調整後ナデ上げ調整。	胎土：良好 色調：灰黄色 焼成：硬 出土 8 T SD-2-1	
13	弥生式土器 壺	口径24.8cm	○口縁部は、要部より外反して開き上部を上方に折り返し側部を面取りしておさめる。 ○肩部はあまり盛らない。	○口縁部外面は斜方向の組いいハケ調整で、内面は横ナデ上げ調整。 ○要部は外斜方向の組いいハケ調整で、内面は横方向の組いいハケ調整。 ○肩部は外斜方向の組いいハケ調整の後に横方向のハケ調整をほどこし、内面は不明。	胎土：やや砂粒を含むが良好 色調：淡灰青色 焼成：やや硬 出土 2 T SD-2-1	
14	弥生式土器 壺	口径 24 cm		○口縁部は、頸部より縦向外に外傾して開き、外面はやや掌手にしておさめる。 ○要部はやや張り、上位部にある最大膨脹部に至り、そこからよくしまった底部へと続く。 ○肩部に2条の回んだ円形の文様をちぢり状にめぐらす。	○口縁部は、内外面ともに横ナデ調整。 ○体部は外斜方向をほどこし、内面は、肩部が斜方向のラブリ調整で、それから下は下から上方に向へのラブリ削り調整。	胎土：良好 色調：灰黄色 焼成：硬 出土 9 T SD-9-5
15	弥生式土器 壺	口径17.6cm		○口縁部は、「く」の字状に外反して開き、端部を断面三角形に強く面取りしておさめる。 ○肩部はあまり張らず、上位に位置する最大膨脹部に至り、そこからよくしまった底部へと続く。	○口縁部は内外面ともに横ナデ調整。 ○肩部から腹部上半部にかけては、やや想い切らキ調整をほどこし、その後ハケ調整をする。 ○体部内面は、器表剥離のため不明。	胎土：良好 色調：赤褐色 焼成：やや軟 出土 3 T SD-3-3

番号	種類	法量	形態	調査	土・色調・焼成	備考
16	赤生式土器 壺	口径15.5cm	○口縁部は、「く」の字状に外反して開き、端部を断面三角形に強く面取りしておさめる。 ○周部はあまり張らず、上部位に位置する最大膨脹部に至る。	○口縁部は、内外面とも横ナメ調整。 ○体部は、内外面ともにハケ調整。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：軟 2T SD-2-3 出土	
17	赤生式土器 壺	口径29.6cm	○口縁部は、「く」の字状に内側ぎみに開き、外面をやや厚く作り、端部を断面三角形に強く面取りしておさめる。 ○端面をヘラ状工具で削り落す。 ○周部は三角状に削る。 ○体部は、やや張った肩部より上位部にある膨脹部に至るが、この腹部は強く張っている。	○口縁部は、内面後方側のハケ調整で、外面斜方向の組いハケ調整。 ○体部は上2／3まで組いタタキ調整をほどこし、その後このタタキ痕と直交する様に組いハケ調整を行なう。 ○内面は、ハケ調整後ナメ上げ調整か。 ○体部外下1／3は組いハケ調整。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：やや硬 3T SD-3-3 出土	
18	赤生式土器 鉢	口径19.2cm	○口縁部は、外傾して立ち上がる体部より強く内側して端部を丸くおさめる。 ○口縁部外面に4条の凹輪文を入れる。 ○小さな腰突穴を1穴有する。	○内外面ともに横ナメ調整と考えられるが、内面は器表剥脱。	胎土：良好 色調：乳灰黄色 焼成：軟 2T SD-2-4 出土	
19	赤生式土器 高杯	口径15.2cm	○内側しながら立ち上がる体部より、一端を強く外側に引き出し、もう一端を受けける形状に内傾して引き出し端部を丸くおさめる。	○体部は器表が剥離しているが、内外面ともにヘラ書き調整と思われる。 ○口縁部は内外面ともに横ナメ調整。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：やや軟 3T SD-3-3 出土	
20	赤生式土器 脚部	脚部径 13.1cm	○水差し型土器の脚部と考えられ、端部をしわりした断面三角形にする。 ○体部との接点外面に6条の凹輪文をほどこす。 ○底部は充填痕跡が見られないことから、抜けていたものと考えられる。	○端部は横ナメ調整。 ○脚部下面下半分はヘラ削り調整で、上半分はヘラ書き調整であるが、外面は器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：乳白色 焼成：軟 3T SD-3-3 出土	
21	赤生式土器 脚部	脚部径 11.2cm	○端部外面を強く引き出し、断面三角形に作る。 ○脚部に現状で3穴の透かしを穿つが、非対称である。	○脚部は横ナメ調整。 ○脚部下面下半分はヘラ削り調整で、上半分はヘラ書き調整であるが、外面は器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：軟 2T SD-3-3 出土	

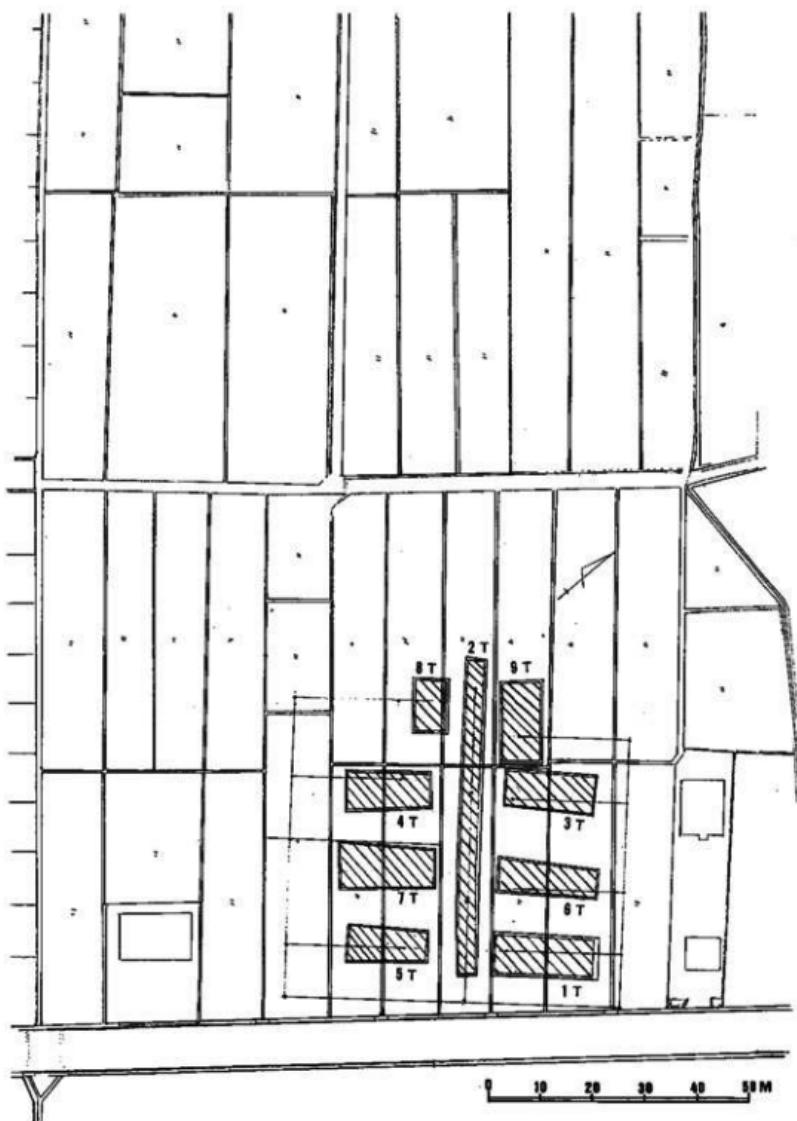
番号	種類 器	高 さ	法 量	形 態	調 査	整 理	土・色調・焼成 度	備 考
22	赤生式土器 脚部	14.7 cm		○腰部は強く面取りをして平におさめ、脚部 は「ロート」状に立ち上がる。 ○脚部上半部には現状で1穴の小さな透かし を穿つ。 ○透かしの上下にヘラ状の工具で並行状線を入れ て区画し、その中に三角形を基本とする 文様を入れる。 ○沈痕文の下に列点文を入れる。	○内外面墨表剥脱のため調整法不明。		2 T SD-2-3 出土	
23	赤生式土器 脚部	11.7 cm		○脚部は、「ロート」状に開き脚部を丸くお さめる。 ○脚部と体部の接点内面に底部とのれた裏跡 を残す。 ○脚部外表面に「川型文」状の文様を入れる。	○内外面とともに墨表剥脱のため不明。		3 T SD-3-3 出土	
24	石 斧	刃巾5.1 cm		○始刃石斧で砂岩系の石材を用いている。			3 T SD-3-3 出土	
25	燧 石			○頭状で4面の使用面が見られる。 ○石材は、砂岩系と思われ、粒子はなめらか である。			8 T SD-8-3 出土	
26	燧 石			○現状で3面の使用面が見られる。 ○石材は、砂岩系と思われ、粒子はやや粗い。			2 T SX-2-1 出土	
27	用途不明 木製品	長さ25 cm 巾8.5 cm 厚さ 2 cm		○全体は面削離をなし、巾5 mm前後の神どり をし、片面はそのままであるが、他の面上に 左右対称の彫り込みをほどこす。 ○この面上に左右対称に7つの穿穴を有する。			3 T SD-3-3 出土	
28	三つ手鍬			○三本刃の鍬と見えられ、柄の着装部はやや 厚手に作られる。			9 T SD-9-4 出土	
29	鍬			○先端部を強く作られた鍬で、柄の着装部に 鉤型突起を作る。			9 T SD-9-4 出土	

番号	種類	高さ	幅	量	形	態	調	整	土・色調・焼成	備考
30	スコップ状木製品				○全般的に丸く作られており残り凹みを残す。 柄は極めて短くやや單手になつてゐる。 部分的に焼けている。				9 T. SD-9-4 出土	
31	高杯				○脚部は円ではなくやや橢円形に近い。 ○脚部は脚手に作られている。 ○杯部は未製品と思われ、削り腹が荒くのこ る。				9 T. SD-9-4 出土	
32	弓状木製品				○彎曲した外側を平に削った丸木弓で、弦を 張る跡は削り出してゐる。 ○筋はていねいに削っている。				9 T. SD-9-4 出土	

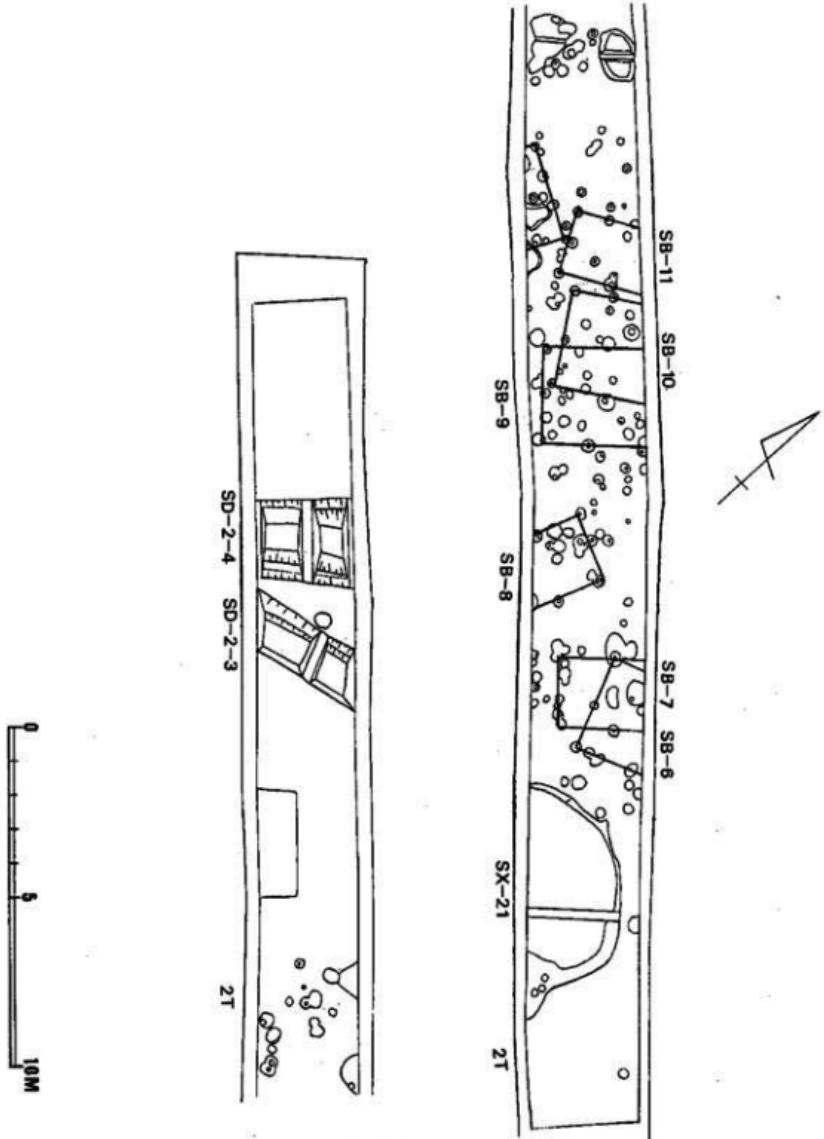


図版1 調査地点と周辺の遺跡

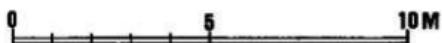
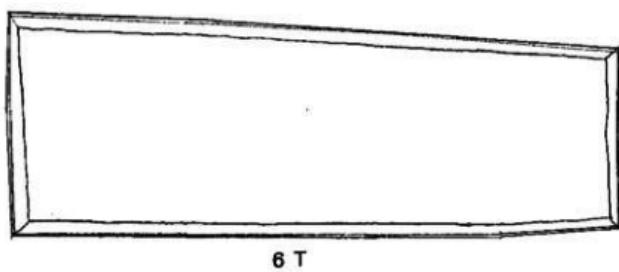
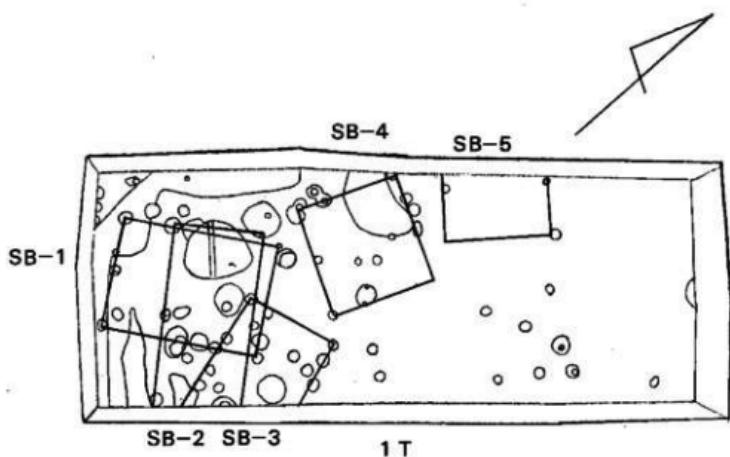
1	馬場遺跡(今回の調査遺跡)	10	南谷遺跡
2	鶴ヶ池遺跡	11	荒神山古墳群
3	杉田遺跡	12	古屋敷遺跡
4	西海道遺跡	13	曾根沼遺跡
5	辻ノ東遺跡	14	日夏城跡
6	蓮台寺遺跡	15	野田沼遺跡
7	寺村遺跡	16	甘呂遺跡
8	蛭目遺跡	17	上沢尻遺跡
9	妙楽寺遺跡		



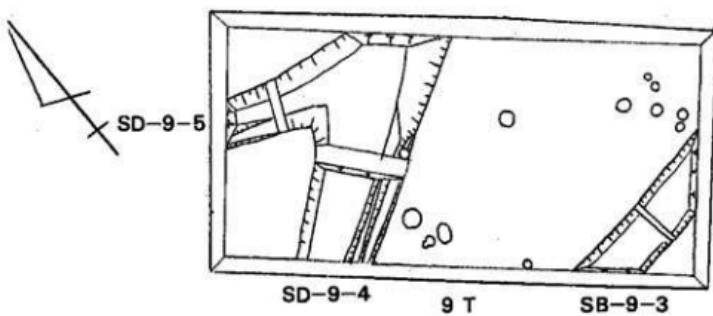
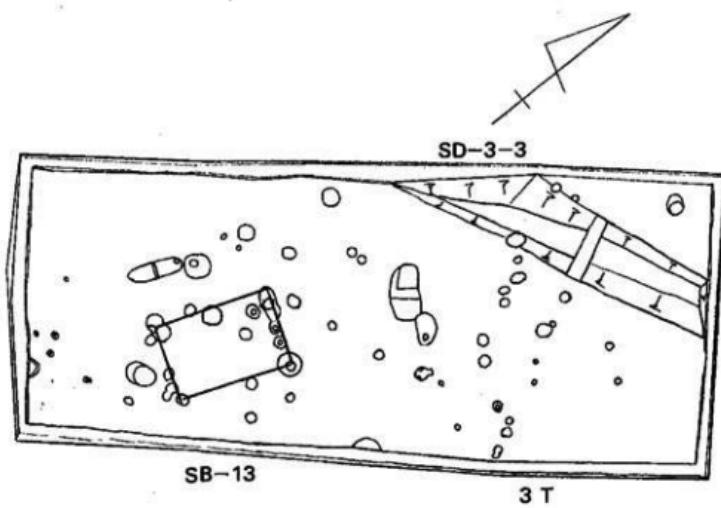
図版2 馬場遺跡トレンチ配置図



図版3 馬場遺跡2トレンチ造構図

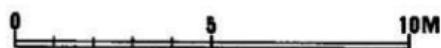
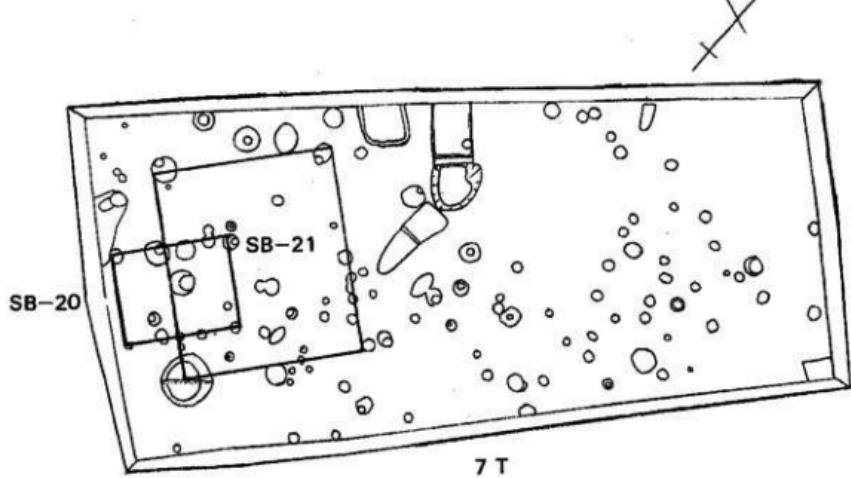
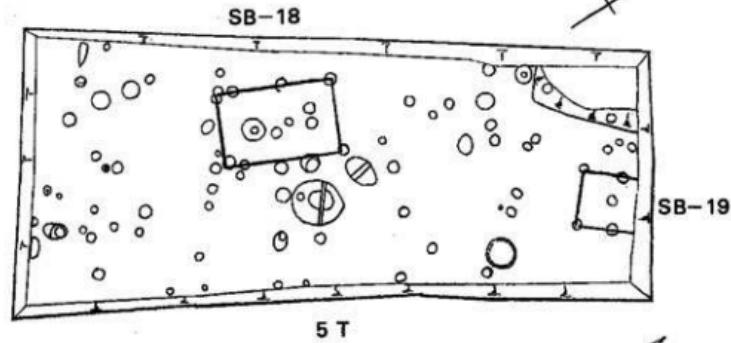


図版4 馬場遺跡 1・6 トレンチ遺構図

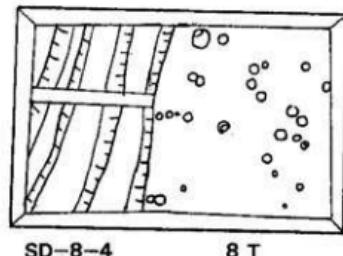
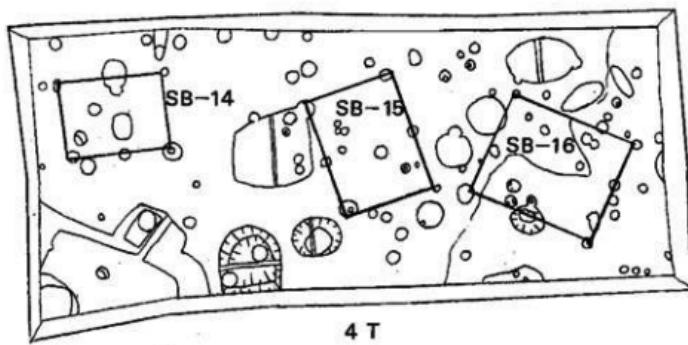


0 5 10M

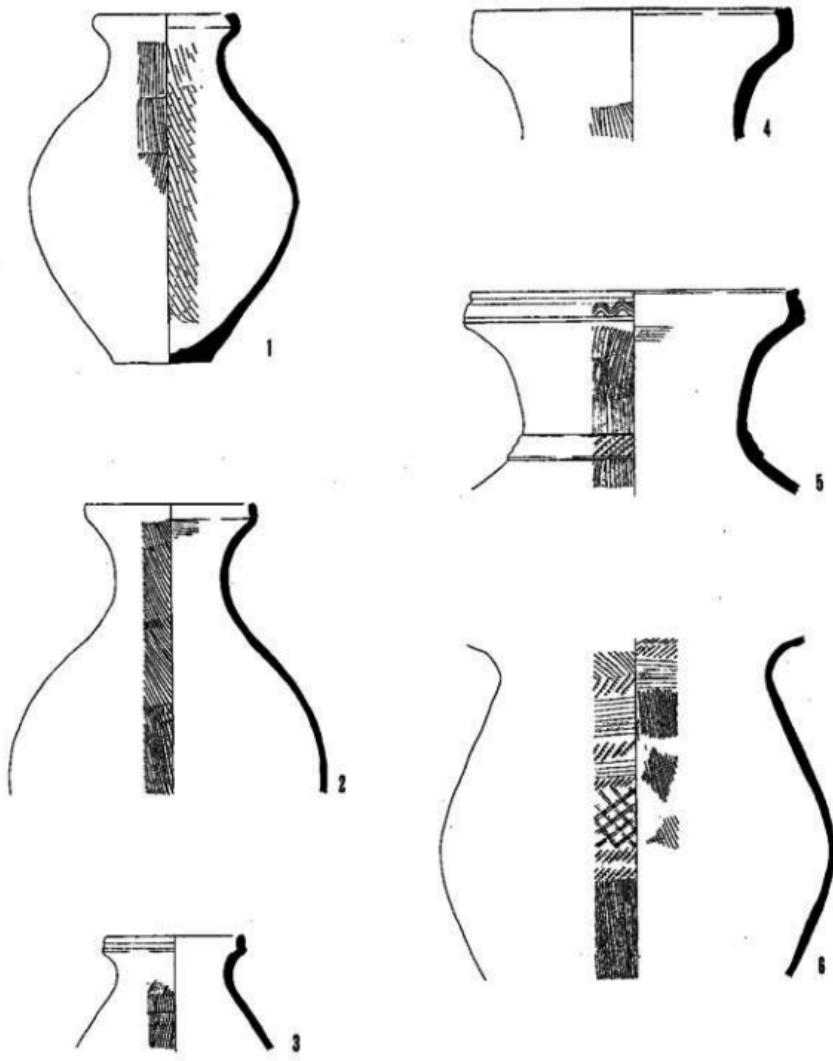
図版5 馬場遺跡3・9トレンチ遺構図



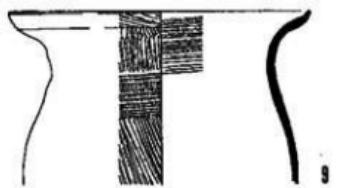
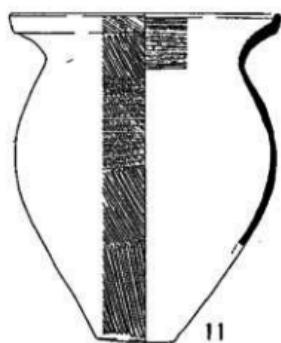
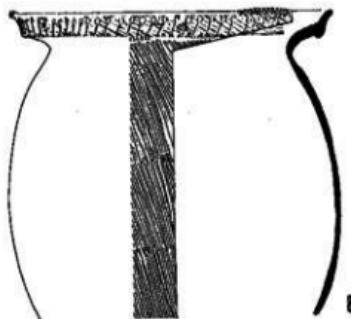
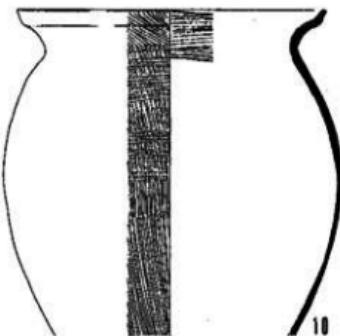
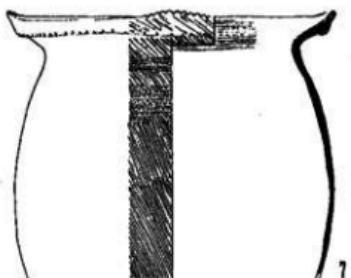
図版6 馬場遺跡5・7トレンチ遺構図



図版7 馬場遺跡4・8トレンチ遺構図

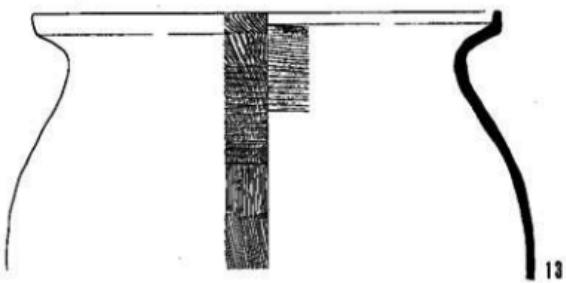


図版 8 馬場遺跡出土遺物実測図

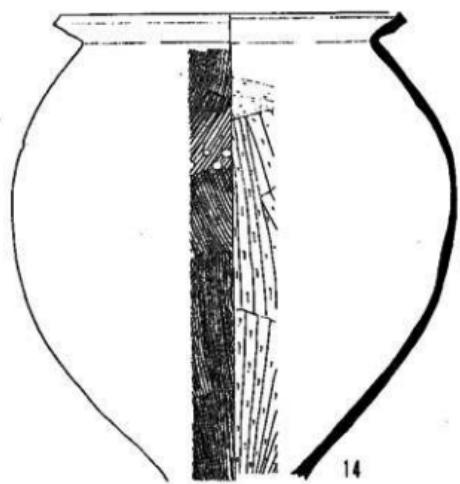


1 2 3 4 5

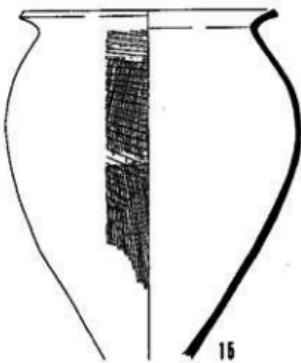
図版9 馬場遺跡出土遺物実測図



13



14



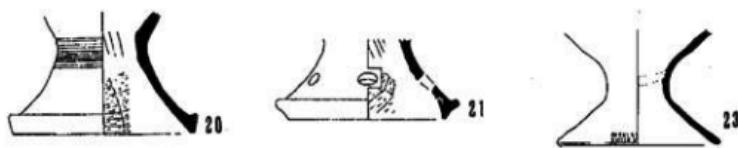
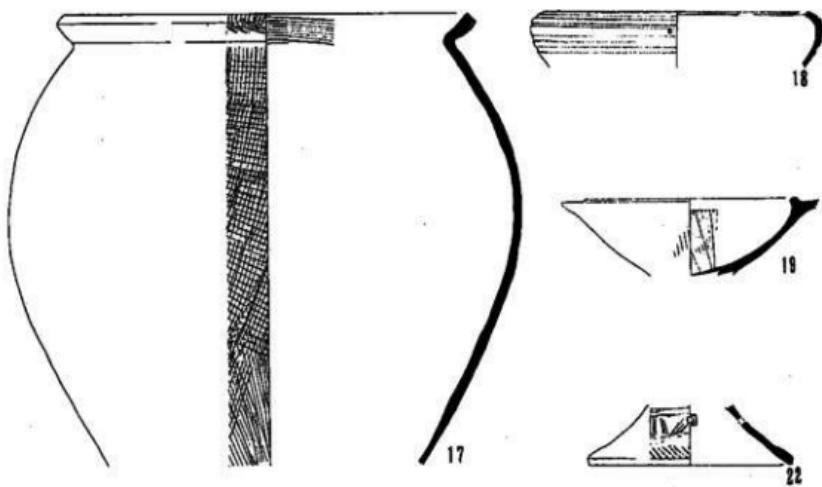
15



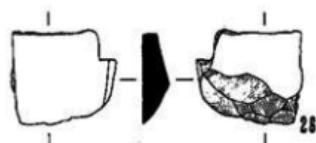
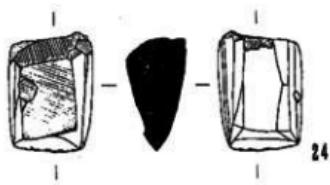
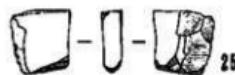
16

1 2 3 4 mm

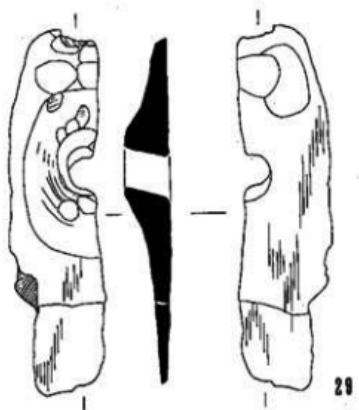
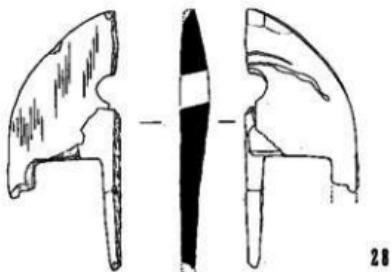
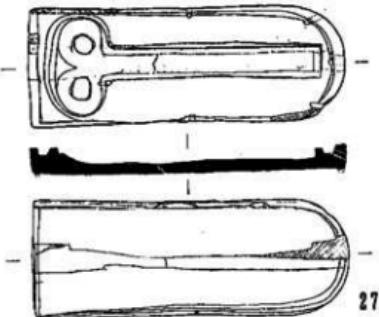
図版 10 馬場遺跡出土遺物実測図



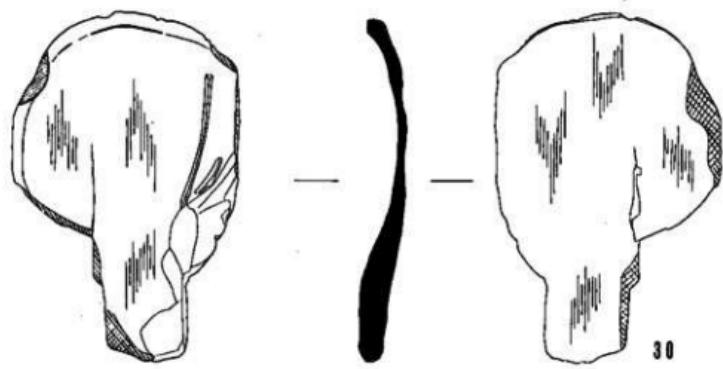
1 2 3 4 cm



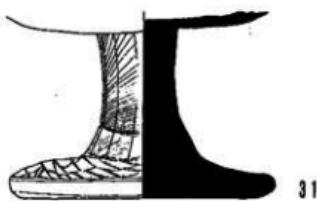
図版 11 馬場遺跡出土遺物実測図



図版 12 馬場遺跡出土遺物実測図



30



31



32



図版 13 馬場遺跡出土遺物実測図



4



5



6

3

図版 14 馬場遺跡出土遺物写真



7



10



8



11



9



12

図版 15 馬場遺跡出土遺物写真



13



14

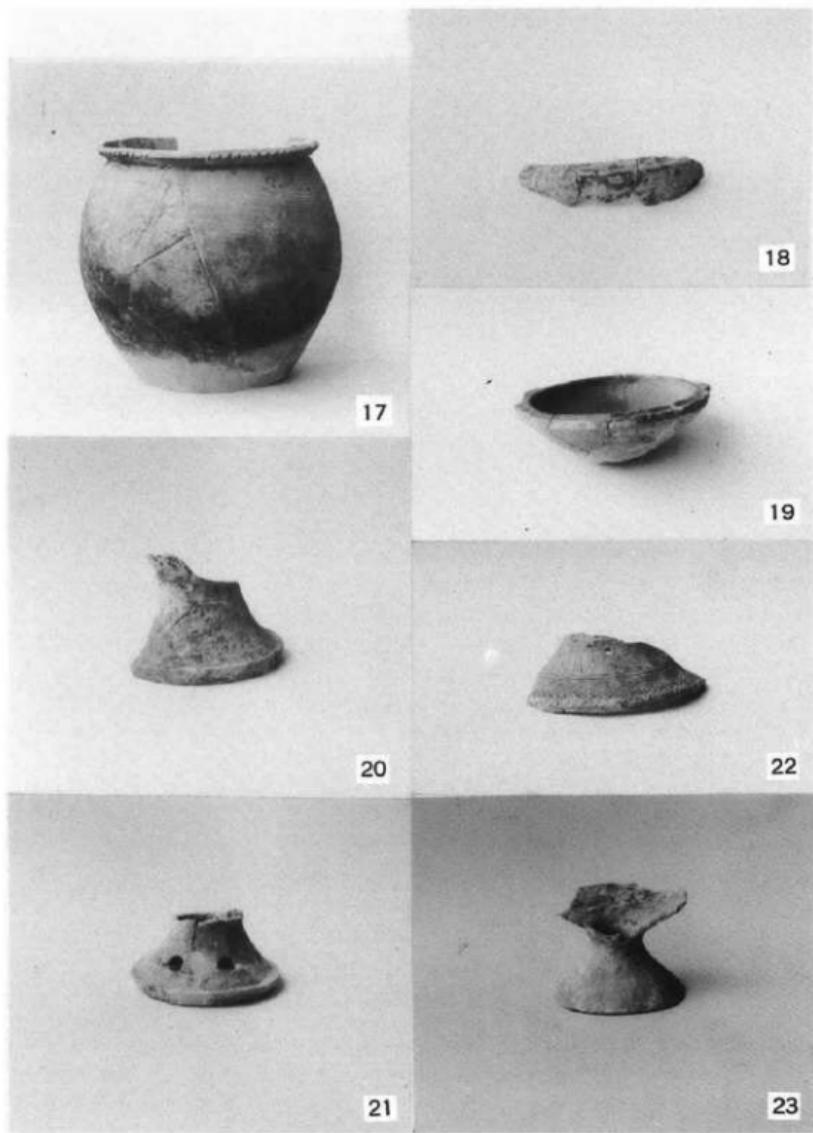


15



16

図版 16 馬場遺跡出土遺物写真



図版 17 馬場遺跡出土遺物写真



24



25



26



27



28



29



図版 18 馬場遺跡出土遺物写真



30



31



32

図版 19 馬場遺跡出土遺物写真



2 T 遺構掘り込み状況

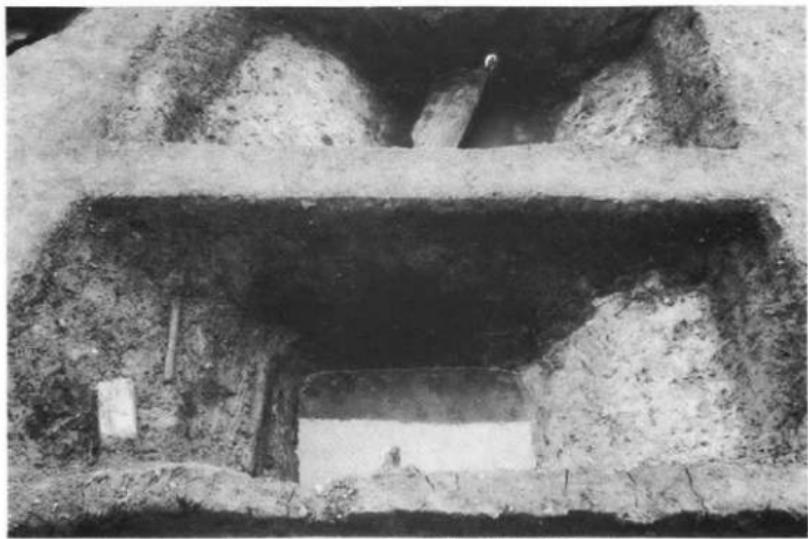


図版 20

2 T 遺構掘り込み状況



2T SD-2-1 遺物出土状況



2T SD-2-4 掘り込み状況



1 T 遺構検出状況



図版 22

1 T 造構掘り込み状況



3 T 遺構掘り込み状況



図版 23

3 T SD-3-3 遺物出土状況



9T SD-9-5 挖り込み状況



図版 24

9T SD-9-5 遺物出土状況

彦根市埋蔵文化財調査報告第13集

**馬場遺跡発掘調査報告書**

1988

編集 彦根市教育委員会

発行 彦根市教育委員会

印刷 株式会社出版印刷

馬場遺跡

昭和63年3月

彦根市教育委員会